

【雑司が谷遺跡～雑司が谷3-19-4・6地区の発掘調査】

案内処周辺は江戸時代の料理屋など鬼子母神の門前町で、参拝客目当ての店が並んでいた場所です。2014年8月に、案内処の裏手で、遺跡の試掘調査と確認調査を実施しました。まだ整理作業中のため、詳細な報告は先となりますが、この調査でも江戸時代の碗や皿などをはじめとした飲食器や、石を使った近代の建物基礎などが発見されています。



発掘調査風景
(炎天下の中、黙々と作業をしました。)



近代の建物基礎
(こぶし程の石が敷詰められています。)



出土した磁器製品
(江戸時代から昭和までの遺物が出土しました。)



鬼子母神参道を調査すると、このような建物の跡がよく見られます。

この遺跡では、江戸時代から昭和時代までの遺物が、大量に出土したよ。細かい破片を1点ずつ洗って、くっつけ、材質や器種、作られた時代などに分けて、図面を作ったりするよ。



雑司が谷まちかど遺跡ミュージアム
「雑司が谷地域の考古学」
2015年2月20日発行

編集：NPO 法人としま遺跡調査会
HP: <http://www.toshima.iseki.org/>
発行：雑司が谷案内処
共催：豊島区教育委員会

雑司が谷地域の考古学

はじめに

豊島区では、1988年に区内での本格的な発掘調査が始まり、現在区内では、17の遺跡が登録されています。雑司が谷案内処の所在するこの場所は、雑司が谷遺跡として、豊島区No.12遺跡に指定され、旧石器時代、縄文時代、平安時代、室町時代、そして江戸時代から現代に至る遺構・遺物が発見されています。特に鬼子母神周辺は、江戸近郊の遊興地として栄え、参道には参拝客目当ての料理屋などが並び、多くの人たちで賑わっていたことが、文献史料や発掘の成果によって分かっています。

また豊島区立中央図書館周辺は、江戸時代には雑司が谷村と巣鴨村の接する場所で、東池袋遺跡として豊島区No.13遺跡に指定されています。この地には「御鷹部屋^{おたかべや}御役屋敷^{おやくやしき}」などの武家地も存在していました。

今回の展示では、発掘調査で得た成果を基に、雑司が谷地域の歴史をご紹介します。



案内処周辺の遺跡



こんにちは。ほくはすすきみみすくのズミンだよ。よろしくね。



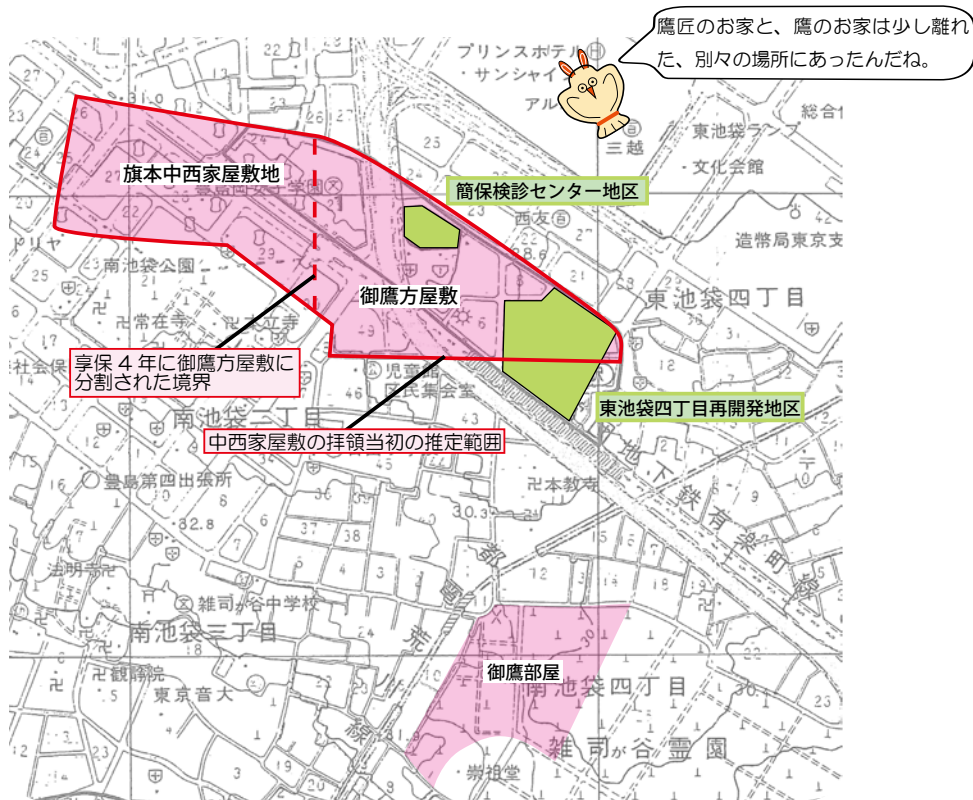
角兵衛獅子のカクベイです。今回は江戸時代の「御鷹部屋」のお話と、昨年の夏に行われた、発掘調査の解説をします。

【東池袋遺跡～御鷹方御役屋敷の発掘調査】

東池袋遺跡は、江戸時代のはじめ頃の旗本中西家の屋敷地をおおむねその範囲とされていますが、1719（享保4）年に屋敷地は東西に分割され、「御鷹方御役屋敷」が1864（元治元）年まで設けられました。屋敷地が分割された享保年間といえば、吉宗が将軍となり鷹狩を盛んに行うようになった時期です。

文献資料によれば、この屋敷地には、20軒前後の鷹匠の屋敷と、鷹匠同心の長屋が建っていました。鷹を飼育している「御鷹部屋」は、現在の雑司が谷霊園にあり、職場と住まいは区別されていました。

東池袋遺跡では、これまでに幾つかの発掘調査が行われていますが、主なものは簡保検診センター地区、東池袋四丁目再開発地区の2つです。これらの発掘調査では、御鷹方の屋敷地であった時代の遺構や遺物が発見されています。



御鷹方御役屋敷の推定位置

【発見された遺構（東池袋四丁目再開発地区）】



発掘当時の様子

発掘調査では、広い屋敷地の中を溝で区切って、個別の屋敷地としていたことがわかりました。屋敷地の一筆ごとに井戸やゴミ穴が配されていて、生活空間は各戸別に区切られていたと考えられます。



発見された池の跡

また東池袋四丁目再開発地区では池の跡も見つかっています。御鷹方の屋敷地の南側は、浅い谷が東西に入り込み、雑司が谷村との境界をなしていました。その谷の中に、木材を使ってひょうたん型の池が作られていました。

水生植物や魚の姿を楽しんでいたのかもしれませんが。



あっ！池の形がひょうたんの形になってる！！

【出土した遺物】

鷹の世話をする鷹匠や同心が集まって住んでいた場所、という遺跡の性格がよくわかる遺物が出土しています。鷹部屋では、鷹の他に、鷹の餌や狩りの練習用の獲物となる小鳥も飼育していました。鷹匠の住まいである屋敷からも多くの餌入れが出土しており、仕事を離れた生活の場にも、多くの鳥が身近にいたことを示しています。



鳥餌入れ（東池袋四丁目再開発地区出土）



蚊遣り（簡保検診センター地区出土）